

## あの方は復活なされたのだ

マタイ28章01～10節  
2022年4月17日  
松田 基子 師

今日はイースターです。イエス・キリストの復活を喜び、祝う日です。キリスト者にとって、神様からの罪の赦しと、永遠の命の保証が与えられた喜びの日です。パウロが、コリントの信徒への手紙Ⅰの15章14節で、

「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなた方の信仰も無駄です」

と断言している通り、イエス・キリストの復活にキリスト信仰の全てが懸かっています。

イエス様の復活は、人類が、自分の命の与え主である創造主なる神様に叛(そむ)き払い切れない罪を犯して、永遠の滅びに向かっていたものを、神の御子のイエス様が、神様の前に出て、全人類の罪を引き受け、身代わりとなって、神様からの罰を受け、神様に呪われ、捨てられて、十字架に架かって下さった、その贖いに対して、神様が赦しを宣言し、

『イエス様が**人類の救い主であることが**証明された』出来事です。

世界に何十億の人間が居ようとも、その一人ひとり、神様の御心によって、命と使命が与えられて、この世界に、送り出されています。

さて、私達人間は、この世界に生まれ、送り出されて来た以上、誰一人、例外なく、死を迎えます。死なない人は一人もいません。死ほど、全ての人間に平等に与えられているものはありません。誰もが例外なく死ぬのに、人間にとって、それは不安と恐れをもたらすものです。人間の最大の敵は、自分の死です。何故、その様に恐れるのでしょうか。ヘブライ人への手紙9章27節に、

「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」

と宣言されています。そこに人間は本能的に、死の恐れを持っています。中には、

「誰だって死ぬのだから、

死なんて、こわくない」

と豪語する人もいます。その人達は人間の存在は、この肉体の死で終わるのではなく、死の彼方の世界があると言う事に、心を閉ざしているからに違いありません。

詩編の90編7節以降には、

「あなた(即ち、神様)の怒りにわたしたちは絶え入り、あなたの憤りに恐れます。あなたはわたしたちの罪を御前に、隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。わたしたちの生涯は御怒りに消え去り、人生はため息のように消えうせます。人生の年月は70年程のものです。健やかな人が80年を数えても、得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。御怒りの力を誰が知り得ましょうか。あなたを畏れ敬うにつれて、あなたの憤りをも知ることでしょう。生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように」

と記されています。

詩編の記者はこのように神様の前に、『人間は如何に罪に汚れているか、人間には、神様の御怒りを消すことは出来ない』ことが記されています。今日いくら寿命が延びても、人は必ず死に、命の与え主である神様の前に立たなければなりません。イエス様は、神の御子の身体に、その全人類の罪を引き受け、神様の御怒りと、罰を受けて、十字架に架されました。それは金曜日の出来事でした。イエス様は午後3時頃

「**エリ、エリ、レマ、サバクタニ**」

『わが神、わが神、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか』

と、心からなる叫びを訴え、父なる神様に全信頼し、全てを委ねて、息を引き取られました。

人間の目には、神様の助けは見えませんでした。

『ナザレのイエス様は、義人ではあったけれども、やはり、メシア・救い主ではなかったのだ』

と、皆、失望しました。弟子たちを始め、イエス様をメシアだと期待した人々の期待は、十字架の前に、脆くも崩れ去ってしまいました。イエス様の直弟子達は、自分たちの身の危険を感じて、皆、逃げ去ってしまいましたが、神の国を待ち望み、イエス様を神の人、預言者として敬い、慕っていた、アリマタヤ出身の金持ちで、マルコ福音書によると、議員のヨセフが、総督ピラトの所に行き、イエス様の遺体の引き渡しを願い出ました。ピラトに願い出る事は、地位あるヨセフにしからず出来なかった事でした。ピラトの命令によって、イエス様の遺体は、十字架から降ろされ、綺麗な亜麻布に包まれて、ヨセフの所有する新しい墓の中に納められました。

イスラエルの地質は、岩山や自然の洞窟が多くあります。そのことから、岩山を小さな小部屋ほどに掘って、石の寝台に遺体を寝かせて、入口を大きな石で塞いで墓にしました。イエス様も、その様な方法で金曜日の夕方、慌ただしく葬られたのでした。墓の周りには祭司長達からさし向けられた、神殿の衛兵達が見張りに立ちました。日没と共に安息日が始まりました。安息日には、人々は礼拝と、最小限の行動しか、許されません。ガリラヤから、イエス様の一行に奉仕するために、付いて来た女性達は、金曜日には、十字架のイエス様に近づく事が許されませんでしたので、遠くからではありましたが、刑場から離れることなく、埋葬に至るまで、その一部始終を見守って帰ってきました。その彼女達も、心痛んで安息日を過ごしました。

そして、安息日の律法から解放されると、週の初めの日の夜明けを待ちました。 **マタイ福音書28章1章**を見ますと、

「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行つた」

とあります。ガリラヤからイエス様一行に従ってきた二人のマリアにとって、イエス様がエルサレムで、十字架に架かれたことは、我が身を裂かれたと同じ苦しみでした。そうであれば、食事もう通らず、立ち上がる気力もなく、悲しみに打ちひしがれて居る事が想像されます。

ところが二人は夜明けを待って、イエス様を納めた墓を見に行つたと言うのです。これは彼女達の力と言うよりも、神様の導きによるものであったでしょう。神様は安息日を終えて、新しい光を輝かせると共に、新しい時代をお与えになるのです。朝日の輝きの中を、二人のマリアは引き寄せられる様に、墓に行きました。

すると二人を待っていたかのように、大きな地震が起こりました。

『地震と共に主の天使が天から降って来て、イエス様の遺体を納めた墓の石の蓋を脇へ転がして、その上に座つたのです』

「その姿は稲妻のように輝き、衣は雪の様に白かつた」

と言うのですから、それは明らかに、神様の出来事が起こっていることが、そこに居合わせた人間には、直ぐに分かつたはずですよ。

4節を見ますと、

「番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった」

と記されています。

番兵達は剣と地位に頼って

『自分たちは強い人間だ』

と思ひ込んでいたでしょう。しかし、神様の前には、罪と恥しかありません。滅びを感じて震え上がり、死人の様になつたのでした。罪ある人間は他者に対して、

『どんなに威力を振るつたとしても、聖く正しい神様の前に出れば、死の恐怖に襲われる』  
と言う事が分かります。

しかし、天使は、番兵達を懲らしめに来たものではありませんでした。天使は女性達を待っていました。そこで、女性達に言いました。

5節に、

「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさつたのだ。さあ、遺体の置いてあつた場所を見なさい」

とあります。岩波訳では、

「あなた達は恐れるな。なぜならば、わたし

はあなた達が、十字架につけられた、イエスを探しているのを知っている。彼はここには居ない。彼は自分で言った通り、起こされたからである。さあ、こちらに来て彼が横たわっていた場所を見よ」

と訳されています。

ここで、先ず、わたし達が知るべきことは、『イエス様は既に復活して墓から出ておられる』

と言う事です。マタイ福音書では、16章21節、17章22節、20章19節の3箇所、

『イエス様は、ご自身が祭司長達や、律法学者達に引き渡され、死刑を宣告され、異邦人の手によって十字架に架けられるけれども、3日目に復活する』

と予告して来られました。しかし、それは決してイエス様ご自身が、

『神の子の力を以て、神の子だから復活された』

と言う意味ではありません。岩波訳の、

『起こされた』

つまり、

『復活させられた』

は、深い意味を表しています。イエス様は全人類の全ての罪を一身に負って、人間イエスとして神様の前に出られました。神様はイエス様を、身代わりだからと言って容赦される事はありませんでした。イエス様に全人類の罪を負わせ、人類の罪を徹底的に罰し、償わせられました。それが神様に呪われ、捨てられて、十字架に架かる事でした。

イエス様は神様の、人類への罪の赦しとして、計画された、このたった一つの方法に、従順に従われました。それに対する神様の答えとして、イエス様による人類の罪の贖いが全うされ、神様が受け入れられたという、その証として、神様が完全に死なれたイエス様を、死から起こされた、復活させられた、ということなのです。イエス様を通して、神様から罪の赦しが与えられ、神様との交わりが許され、人間に神様の御許、天の国へと向かう道が開かれたのです。

ここにイエス様による新しい救いの道が開かれました。天使が墓の入口の石を転がしたのは、何も、復活のイエス様が墓から出てこられる為ではありませんでした。イエス様は既に、時間や場所に縛られる事の無い、霊の体に甦って、重い石の蓋など全く支障なく、既に墓の外に出ておられました。天使によって墓の蓋石が転がされたのは女性達のためでありました。彼女達は、恐る恐る墓の中を覗きました。しかし、そこにイエス様の遺体を見出すことは出来ませんでした。

すると、天使は続けて28章7節で、

「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。

『あの方は死者の中から復活された。

そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』

確かにあなた方に伝えました」

と告げました。女性達は、天使達との出会いに恐れはしましたが、神様を信じる彼女達には、喜びがわき上がり、この事を一刻も早く弟子たちに伝えなければとの思いに掻き立てられました。

彼女達は、弟子たちに知らせるために、墓を立ち去って走りだしました。すると行く手に人がいます。その人は、女性達に向かって

「おはよう」

と挨拶してきました。その声は、彼女達に聞き覚えの有る、慕わしいイエス様の声でした。

28章9節を見ますと、

「婦人たちは近寄り、イエスの

足を抱き、その前にひれ伏した」

とあります。そこには幽霊ではない、幻覚でもない、正真正銘の、復活されたイエス様がおられました。女性達は疑いをもって、イエス様の足を抱いたと言うよりも、

『イエス様と分かって、唯々喜びに溢れて、思わずイエス様の足を抱いた』

『そしてイエス様は、確かに復活された事を、自分の手で、確信した』

と言う事でしょう。

イエス様は10節で、

「恐れることはない。行って、わたしの

兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。  
そこでわたしに会うことになる」

と言われました。イエス様は弟子たちとの最後の晩餐において、マタイ26章32節で、

「わたしは復活した後、あなたたちより  
先にガリラヤに行く」

と言っておられました。ペトロはその席上、26章35節で、イエス様に、

「たとえ、御一緒に死なねばならなく  
なっても、あなたのことを知らないなど  
とは決して申しません」

と言い、他の弟子たちも皆同じ様に言ったのでした。

それにも拘わらず、ペトロはイエス様の裁判を見守る中で、周りから三回

『お前もあの連中の仲間だ』

と問われ、三回共、イエス様を

『知らない。関係無い』

と否認したのでした。他の弟子たちも、ヨハネ福音書では、ヨハネだけが十字架の下にいましたが、皆イエス様を見捨てて逃げ去りました。

そんな不甲斐ない弟子たちを、イエス様は最初からご存知で、案じておられました。ルカ福音書では、ペトロのイエス様、否認予告の中で、22章32節で、

「わたしはあなたのために、信仰がなくな  
ないように祈った。だから、あなたは立ち  
直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」  
と言っておられます。

イエス様は復活され、ご自身による罪の赦しの福音を、先ず、愛する弟子たちに、お与えになろうとしておられました。それも彼らの全てを受け入れて、兄弟と呼んでおられます。イエス様は彼らに新しい出発をお与えになろうとしておられました。そのために、彼らの信仰の原点である、ガリラヤ、罪と恥とが頭わになる、ガリラヤで、彼らと再会し、全ての罪を赦し、彼らがイエス様の愛に答えて、この永遠の命に至る福音の担い手となる事を、お考えになっていました。弟子たちはガリラヤで復活されたイエス様と再会しました。罪赦されて喜びに溢れ、彼らはそれから命を賭けて、イエス様による罪の赦しと、永遠の

命の福音を宣べ伝えて行きました。

彼らのその生き様こそ、イエス・キリストの復活の証人であり、そこにイエス・キリストによる罪の赦しと、天国への保証が証されています。

イエス様は今も生きて、聖霊によって、その祝福を、私達にも与え続けて下さって居ます。

イースターの朝、私達も自分のガリラヤ湖、罪と汚れと恥に覆われた、どうしようもない自分の心のガリラヤ湖ですが、イエス様は既にそこで私たちを待っていて下さいます。私たちは喜んで急いで自分の心のガリラヤ湖に行きましょう。

そこで、イエス様に再会し、イエス様から罪の赦しの宣言を受け、新しい使命を与えられて、御国を目指し、イエス・キリストに更に信頼し、信じ、従って行こうではありませんか。

お祈りをいたします

愛と憐れみに富み給う天の父なる神様

あなた様は罪深い私たち人類の為に御子イエス様を十字架に架けて迄、救いの道をお与え下さいました。心から感謝致します。

イースターは、神様が、イエス様によって確かに罪を赦し、御国に迎えて下さる事の保証です。この絶大なる恵を見失うことなく、堅く信じて、命の道を歩む者と成らせて下さい。

お一人おひとりの上に、この確かな限りない祝福をお注ぎ下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。